《海外研究室事情(17)》

Osservatorio Astrofisico di Arcetri

アルチェトリ天文台（イタリア共和国）

http://www.arcetri.astro.it/

今日，自然科学博物館として知られる，Specola[脚注1]にアルチェトリ天文台の起源は求められる．Specolaはエトルリア国王により[脚注2]，1807年に創設された自然科学の研究教育機関であり，フィレンツェの城壁内にあった．しかし，城壁内からの観測の限界を悟ったDonatiは，当時世界第二位の口径を誇った28.4 cm望遠鏡[脚注3]を含め，標高180 mのアルチェトリの地へ移設，天文台を開いた（1841年）．ここに，今日の天文台は産まれた．時は下って1960，70年代，電波天文学の揺籃期に口径2 m，5 m，10 mの3台の電波望遠鏡が活躍し，1.4/ 9.3 GHz帯での電波干渉計観測が行われていたことは述べておきたい．

フィレンツェを囲む城壁をローマ門から出よう．正面に見えてくるメディチ家の別荘のひとつ，ポッジョ・インペリアーレを右に見ながら丘を上がれば，天文台に着く．幾重にも連なる，なだらかな緑の丘にはオリーブの木が似合う．向かいの丘からは，ガリレオ・ガリレイが亡くなるまで過ごした家が静かに僕らを見守る．

フィレンツェはルネッサンスの大輪の花である．今も街の区画は当時と変わらない．そればかりでなく，街のそこかしこに，鋭く優美で，熱に浮かされた，そして時に憂鬱で地獄にも成り得る15世紀のフィレンツェが生きている．古代ローマ文明は確かに偉大であったが，所詮，古代ギリシアの模倣である．決して本物を越えることはできない．だからこそ，ルネッサンス以降のイタリアの歴史こそが本物なのだ，との強い自負がFiorentino（フィレンツェ人）にはある．そのルネッサンスの精神から逃れ，この街に生きることは何人にもできなかろう．知らず知らずのうちに，ミケランジェロやコジモらと語り合うことになる．「生きるとは何か」，「科学者として，かくあるべきか」を問い続ける自分に気がつくのである．

アルチェトリ天文台の今日の研究内容についてはwebページをご覧頂ければよいので，頁を割かない．理論から観測まで，世界をリードしているそうそうたる顔ぶれに気づかれるだろう．私は「星形成グループ」のポスドク研究員として，昨春フィレンツェへやってきた（最近，契約が2003年春までの計3年に延長された）．これまで集中してきた低質量原始星の観測的研究（一部を2月号の天文月報に寄稿した）に加え，大質量星の進化の研究プロジェクトにも参加している．

日本で言えば国立天文台に相当する天文台がイタリア各州にあり[脚注4]，トスカーナ州にあるのがアルチェトリ天文台である．実際には，フィレンツェ大学天文学科，CNRと呼ばれる研究機関[脚注5]に所属する人を含めて，約60人の天文学者，各20人の技術スタッフ，事務職員，大学院生及び学部生[脚注6]の計120名が常駐する．天文学者の4割が女性（年齢分布に大きな偏りはない），さらに4組の夫婦の天文学者がいる．これらはイタリアの天文台の中では突出した数字ではないらしい．

情熱的でおしゃべり好きのイタリア人に囲まれての毎日は，文句なしに楽しい．しかし，あまりにも彼らが陽気すぎて！一緒に仕事をしていると，夕方には私だけ，へとへと．底抜けの明るさだけなら，まだいい．ここは世界に知られたイタリ

仕事仲間の共同研究者，技術スタッフとアルチェトリにて．左からD.パネッラ，私，F.パラージ，L.テスティ．R.チェザローニ，残念ながら，この日は，私の良き相談相手でもあるM.ウォルムスリー教授は不在だった．

ア！　怒りを通り越して笑い飛ばすしかない，能率の悪さと気まぐれが，あなたを待ちうけている．それでも，この国のおおらかさと時間の流れに慣れてしまえば，逆に日本社会が怖くなる．

天文台の技術スタッフや事務職員の半数は英語を話せない．そもそもイタリアにいるのに英語を話すのは失礼だ，と一念発起してイタリア語の集中クラスに行った．バスの待ち時間やトイレで動詞の活用を必死に覚える．ちょっとでも，イタリア語が話せると，とても楽しい．アルチェトリ天文台は，ボローニャ近郊にある32 m電波望遠鏡（受信可能周波数は，1.4から23 GHz）の運用に参加し，1987年以来，水蒸気メーザーのモニターをしている．私も観測チームに加わった．ボスは，いつも私のペアの技術スタッフに，イタリア語しか話せない人を“ご丁寧に”割り当ててくれる．「イタリア語の練習のためだ」とにっこり笑いながら．

さて，日本の若手の皆へ．海外へ出よう．天文学はもちろん，貴方の人間的大きさを広げてくれるのは間違いない．英語圏にこだわる必要はない．世界の若手とpositionを競い（それは，貴方の自信へもつながる．日本では評価されなかった，貴方の一面が評価されるかも知れない），グループの一員として責任を果たし，その国の言葉を覚え，その国の通貨で給料をもらい，その国に税金を納める．日本の機関から給与をもらい派遣される“ビジター”研究者には，決して見えない世界へ飛び込もう．ひとりで涙を拭う夜も必ずある．それでも，その涙を補って余り得る感動が貴方を待っているはずだ．

最後に，最愛の伴侶，新永浩子（中華民国・中央研究院）に「ありがとう」を伝えることを許してほしい．彼女の深い愛と理解がなければ，ユーラシア大陸の東西に離れての生活は，そもそも成り立たなかったはずなのだから．

古屋　玲
（アルチェトリ天文台・ポスドク研究員）

脚注1：手元の辞書によれば，Specolaは天文台，望楼の意．実際には，天文学だけでなく医学，動物学，鉱物学などの計7部門から構成されていたらしい．Specolaとガリレオの活動に関連はない．なお，本文中のイタリア語からの訳は，すべて筆者による．

2：16世紀から続いたトスカーナ大公国の終焉は1801年．エトルリア王国となるも，1804から1805年にかけてナポレオンの支配下におかれる激動の時代だった．

3：レンズこそ交換されたが，アルチェトリ天文台に現存する．

4：それぞれは独立の組織である．

5：ドイツのマックスプランク研究所のイタリア版とも言うべきか．

6：イタリアの大学（入学は19歳）では，（物理系では）4年かけてLaureaと呼ばれる課程を修了する．修士課程は存在しない．Laureaに続いて，3年間の大学院課程を終われば，めでたく博士（Dottore di Ricerca）となる．Laureaの卒業論文の水準は，日本の修士論文並みかそれ以上である．